

---

# **僕と彼女の生存競争**

涼月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と彼女の生存競争

### 【Zコード】

Z5198P

### 【作者名】

涼月

### 【あらすじ】

「僕」と主人公は今年、一年下の後輩の子「楠木 麻衣」に告白された。

人生初の告白に僕は戸惑つが、OKしてしまった。

その日の帰り、麻衣は僕を夕食に誘う。

そこで彼女は、自分は進化、突然変異を扱う研究員という身分を語つた後、「先輩

は突然変異を起こしていて、先輩が子孫を作ってしまうと、ヒトが

枝分かれして、現生人類の進化に影響を及ぼしかねないから私は先輩を殺さなければならない」と告げる。

彼女の手には銃が握られていた。

主人公が諦め半分で最後の言い訳をしたところ、彼女は受け入れてくれた。だが、その後に待っていたのは、彼女との監視目的の同居生活と様々なヒロインたちによる恋模様だった。

ヒロイン達との日常生活の中で、突然変異を起こしてしまった主人公は、

自分のコンプレックスである突然変異とそれによって引き起こされる生存競争というキーワードに主人公は気づき始める。

主人公はそのしがらみの中で誰と交わるのだろうか？

## 第一話 彼女の告白（前書き）

初めての小説投稿です。下手ですが長続きさせたいと思っています。

## 第一話 彼女の告白

高校一年の秋、少し肌寒くなつた廊下を僕は何時も通りに歩いていた。

「あの・・

ふと、僕は後ろから微かに聞こえた声に振り向いた。見ると僕の真後ろには一人の女子が立つていて。彼女は小柄な体をしていて、その体のラインはとてもスマートで美術館で見るような彫刻のように美しく、それを少し茶色くて波立つ髪が彼女の凛として美しい顔をを包んでいた。小柄な体からすると後輩の一年生だらう。

「僕に何か用？」

僕は彼女に優しく話しかける。

彼女は僕の言葉を聞いた後、僕の目をじっと見つめてから話し始めた。

「せ・・先輩のことが好きなんです。ど、どうか私と付き合ってください！」

あまりに突然過ぎたので、僕はしばらく絶句した。僕は彼女と喋つたこともなければ、彼女の名前すら知らない。

「本当に一眼ぼれなんです。付き合ってください」

彼女は戸惑う僕に押して頬んできた。彼女の顔はさらに下を向いて、茶色い髪ごしに彼女の頬が真っ赤になつて、もうここからに逃げだしてしまいそうだ。僕に詮索している時間はない。

「僕で、よければ」

気の利いた返事じゃないつて僕にも良く分かるようなくつこ出した言葉だった。

「あっ、ありがとうございます。私、1Eの楠木 麻衣つていいます」

彼女はそういうつて紅く染まつた顔を見せて廊下を走つて行く、その姿はとても純潔で汚れていない、僕がこんな可愛い子と付き合つて

しまつていい物なのだろうか。

\* \* \*

今日一日の授業を終えて、僕は教室を出る。楠木さんは寒い教室の外で待っていてくれていた。

「待つてくれたんだ、ありがとう」

僕が彼女の頬はまた真っ赤になる。茶色の髪といい、小柄な体といい、なんて可愛いのだろう。

「先輩、今日はこれから予定ありますか?」

「いや、特に予定無いけど」

「もしよかつたら、私の家で夕食とかどうですか? 料理店やつてるんですけど、今日、親がいなくて」

楠木さんのご両親は旅行なのだろうか、とすると、彼女は今日を狙つて僕に告白したのだろうか。

「いいよ、喜んで」

僕は笑顔で彼女の誘いを受けた。

雲がかってぼんやりとしている夕陽の下、街路樹の落ち葉をパリパリと踏みながら、一人で楠木さんの家に向かつ。

「楠木さんは勉強は出来る方?」

僕は彼女に話しかけてみる。

「それなりに、努力してるんで大丈夫です」

「そつか」

話が長続きしない・・でも彼女の家でまた話すことが沢山出来るかも知れないと思い、僕は黙々と彼女とともに歩く。彼女はそんな僕に自分から喋りかけてきた。

「先輩、私・・先輩のこと好きですよ」

「どうして?」

「一目ぼれかも知れません」

「楠木さんの運命の赤い糸は僕につながっていたわけだ・・こんな男だけだからも宜しくね」

此処が楠木さんの店か、結構洋風な感じだ、二ス塗りしたテープルが幾つも並んでいて、その奥に小さな厨房がある。

「先輩はそこで座つて待つていて下さい。すぐ用意しますから」  
彼女は小さな厨房で料理を始める。フライパンや鍋を小さな手で運んで材料を揃える彼女。こうしてみると、とても可愛い。でも、彼女が料理をする手つきは実に危なっかしい。

「なんか手伝おうか」

と僕は彼女に声を掛ける。

「いえ、大丈夫ですから」

彼女は笑つて返事をした。

数分後、料理が運ばれてきた。ハンバーグとスープ。定番といえば定番だが、彼女が作つたそれは料亭で作るような本格的なもので茹でたニンジンやブロッコリーなども添えられていた。

「本格的だね、お金払わなくて大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ」

「じゃあ、頂こうかな」

「召し上がり」

彼女はにっこりと笑う。僕は何時も箸を使ってハンバーグを食べているため、お世辞にも器用とは言えないナイフとフォークを扱い始めた。

「先輩は、この所、体の調子が悪く無いですか」

料理が半分程僕の胃に落ちた頃、彼女は何の前触れもなく聞いてきた。

「確かに具合が悪いね 4・5日前から」

彼女は長いため息をついた後、がっくりと肩を落とした。彼女の髪が振り子のように動く。

「そうですか、やっぱりそうだったんですね」

そうだ、彼女の言つとおり僕は四五日前から具合が悪かつた。吐き気、下痢、頭痛、倦怠感。特に頭痛がひどい。それが一体何なのだろう?

彼女はおもむろに携帯を取り出して電話をする。

「もしもし、彼に間違いないです。ええ、計画通りやつてしまい

ます」

彼女は数十秒間喋った後、携帯をため息と共に閉じる。

「楠木さん、なんか僕の事で、問題でも？」

彼女は無言で一枚の名刺を僕に差し出した。

進化・突然変異危機管理センター、助手 楠木 麻衣

「单刀直入にいいますと、先輩は突然変異を起こしました。ただの突然変異なら何もしませんが、

あなたの場合はあなたの子孫が我々現生人類の進化を大きく崩す可能性があります」

彼女の言っていることがよく分からないので、僕は結論を聞いてみる。

「えっと、それで楠木さんはなにがしたいのスープをすりつぶ喋る。

彼女は結構な時間、うつむいてから、すつ、と顔を上げて溜めていた言葉を吐き出す。

「ここであなたに死んでもらう事です」

「なんだって！？しょ・・証拠は？！」

彼女は書類を一枚取り出して見せた。

「先輩の血液型、先輩のご両親の血液型です。これがすべて条件を満たしています。原因も言いたいですが、長くなりますが…」  
「」と、楠木さんは小柄な学生服から重たそうになにか取り出す。黒くて、鈍い光が見えた。銃だ。そんな馬鹿な、なにかの冗談だろう？

だが、そんな冗談にしては彼女の態度といい、言動といい、よく出来すぎている。

彼女が学生服からそつと出したと思った瞬間、銃をぐつと握り締めて僕の額に銃口をつけた。ひんやりとした金属の冷たさが、額に伝わってくる。これは、本物の銃だ、間違いない。

僕は生睡をのむ。

「先輩、最後に言つことがありますか？」

彼女は握り拳にピッタリ収まるようなとても小さな拳銃を持つている。訳が分からぬ。でもこのまま無抵抗で殺されるのは實に惜しい。よし、駄目元で最後のあがきをしよう。

僕はテレビでみたことを脚注を交えて話した。

「楠木さんは、進化つて分かるよね。」

「・・・知つてますよ。それが仕事なんで」

それぐらい知つてる、当たり前の事だと言わんばかりに彼女は呆れた顔をした。

このときも彼女は銃口を僕の額に当てたままだ。

僕の額から冷や汗が垂れた。

「他の生物と共存したり、対立したりすることで個体数を一定に保つたりできないかな」

「つまり、あなたの子孫の存在が人類にとつて有益になるといつことですか？」

「どこかの映画みたいに人を襲うわけでもないでしょ、僕の子孫は・

・  
だから分からないと思うんだ、有益かそうでないかなんて、君に分かるはずないよ。もし計算して出した結果だとしても

彼女は引き金に入つていた指をどかして拳銃にロックをかけた。

「確かにそうですね・・私が納得しなければどうしようもない・・上の人命に命令されてやつたんです、確かに先輩の言い分は正しいと思います。御免なさい。私どう謝つていいか・・」

「ああ、助かった・・もう別に気にしてないよ、怖かつたけどね  
まだ、生きている心地がしない。危なかつた。なんとか乗り切つたようだ。」

楠木さんはテーブルの上に置いてあつた食事を片付け始めた。

「片付けなくても良いよ、毒とか入れてないでしょ」

無用心にそういうて、僕はテーブルに座り、彼女の料理を食べる。

僕の頭はぼんやりとしていながらも彼女の事を信じた。僕と楠木さんは本当に赤い糸で繋がっているのかも・・

「やっぱり優しいんですね、先輩つて・・」

彼女は、僕が座る椅子の横でがっくりと肩を落としている。これで一段落つてところか。

だが、僕の中にはまだつかえている部分が残っている。  
突然変異つていつたいなんのことだろう、なぜ僕がそんな目にあわなければならぬんだ。そもそも原因はなんだろう、新種の公害か、被爆か、それとも生物に本来行われるべきであろう突然変異による進化なのだろうか？とにかく彼女は僕を見逃してくれたようだ。これからゆっくり探つていこう。

「先輩、私、本当に先輩のこと・・・  
「なんか言ったかい？」

## 第一話 彼女の告白（後書き）

この小説に対しても、感想やアドバイスがあったらどんどん送つて来て下さい。

## 第一話 原因・・同居!?(前書き)

ちょっと長文です。今回は僕の突然変異の原因です  
あまり、ストーリーには関わりませんが、頑張って書いてみました。

## 第一話 原因・・同居!?

楠木さんは僕の部屋に立っていて、僕に銃を向けてくる、僕の部屋で・・

「昨日の続きかい?」僕は疲れているのか、そんな台詞しか口から出せない。

「なにいってんの?」

彼女は笑みを浮かべてこういう。

「そろそろ、いい加減にして貰わないと・・・」

彼女の銃の引き金が・・・

パシンと音がした。パシン?つて

そうしている内に「元気」が来た。

「痛っ!」

そこでやっと目が覚めた。

そうか、さっきのは夢だったか・・

目を開けると、新聞紙を持った活発な少女、いや、同じ年の子が立っていた。

「おっ、由香か・・おはよ」

由香は僕の幼なじみだ。家が近いから、小学生の頃から仲が良かつた。

僕が遅刻しそうになると、たまにこうして無断で家に上がりこみ、叩き起こすのが彼女の日課である。

ちなみに身長は麻衣よりも下だ。

「昨日、後輩に告られたからって、考え込んで・・

「なんで知ってるんだよ、そんな事」

「学年女子の間ではすぐに噂が広まったからね、まあ、同じクラスだしいつも年もつき合つてると分かるのよ」

由香の話を聞きながらながら制服を着る。

「朝から低血圧だね、もしかして、振られたの？」

「なんで振られたことを前提に話すかな・・・」

「告られた事自体奇跡だし、2日も続かず終わるかなって

「案外酷いこというな、お前」

「そんなこんなので、今日は由香と登校する事になった。

「頭の具合はどうなの？」

やはり、由香も心配してくれていたのか。

「もう、平気だから」

彼女を心配させまいとついた嘘だった。何時になつたら、この痛みは取れるのだろうか。

寝不足もあるが、今日はまた一段と酷い。

楠木さんに聞かないといけないな・・・

\* \* \*

早速、昼休みに彼女の教室に行つてみる。廊下を歩いている時は、昨日の事もあつてか、

周りからの視線がものすごく多いような気がした。

「楠木さんいるかな」

教室の前で女子を引き止めて呼んで貰つた。

「麻衣～先輩呼んでるよ」

彼女はお弁当を広げて食べていた。

「ごめんね、食事中に」

「いえ、大丈夫ですから、なんですか」

「頭痛は何時、治るのかな？」

「ここだと、長く話せないので他の場所で」

彼女は僕の手を握つて、校舎裏まで連れていった。

「頭痛はじきに治ります。でも、心配なので、上に頼んで薬を作つて貰うことにしました」

「あつ、そなんだ。でも何で校舎裏に？」

「突然変異の原因と昨日、私があなたを殺そうとした理由を話して

おこうと思いまして

彼女は小声で話始める。

「じゃあ、此処はどこですか？」

「東京のはずれ」

「数週間前のことです、米軍の新型偵察機の塗装が剥げて日本の在日米軍基地に着陸したんです」

「その塗装が原因？」

「恐らくは・・最初はうちの研究所のミニマズから発見された異変で、大体が50、60代の人が発症してゐるんです。この学校の先生方の中にもこの症状を出している方がいます」

「でも、僕は十七だよ」

「稀な例です。ロシアで一人、ヨーロッパで五人、アメリカ西海岸で四人、中国はアメリカの偵察目標らしいんで百人程度が確認されています。これは資料から算出したものですが」

「全員殺したの？」

「中国にこの情報を流せば外交が悪くなります。他の国々は政府の命令で全員軍によつて秘密裏に」

「で、なんで僕を見逃したの？」

「それは、先輩がもつともな理由を言つから・・でも日本は政府が暗殺を拒否したから、研究所の命令で秘密裏にやめうとしたので、見逃す余地があつたんです」

「でも、なんで研究所にいるの？普通の学生なら・・・」

「父が重役の研究者なんで、その助手です」

「君のお父さんが僕を？」

「いえ、その上の人です」

「そつか、やつと分かつたよ。じゃあ薬を飲んだら、晴れて自由の身だね」

「いえ、そこが問題だつたんです。暗殺は免れたとしても、監視は続行されます。その条件の下日本は暗殺を拒否したんです」

「えつ、じゃあ、家の中にカメラとか付けたり、ストーカーとかさ

れるの？」

「はい、そうなると思います。ただそれだけではなく、あなたが結婚したりして、子供を持つとしましょう。それも監視対象に入ってしまいます」

あまりに衝撃的なので僕は言葉を失った。まるでSFTのような話だと思っていたが、僕の子供まで巻き込むとは。僕は落胆する。

「わかったよ。じゃあ、僕は教室に戻るね」

「先輩・・・」

楠木さんはまだ僕に伝えるべき事があるらしい。もう放つて置いてくれ、構うな。

「まだ、なにがあるの」

「わ・・私と同居・・いえ、結婚してください！」

「えっ、それって・・・どういうこと」

「私を決められた婚約者だと思つてお願いします」

言われてみれば彼女は研究者だ、昨日のこともある。監視名簿で済ませればそんなことも可能なのだろ。だが、彼女に迷惑を掛けているいけない。

「無理しないでいいよ、君には君の人生がある」

「無理なんかしてません、昨日の告白も、私が見逃したのも・・先輩のことが好きだったから！」

振り返ると彼女は泣いていた。

それを待つていたかのようにチャイムが鳴る。僕も彼女も授業には出られそうもない。

「ごめん、楠木さん。

## 第一話 原因・・同居ー? (後書き)

前書きで話した原因は、彼のよつたな症状が、世界中で発生していく世界各地で同年代の子供が暗殺されているといつ、事を書きたかったので書きました。

楠木は彼を見逃しました。それは政治的な絡みも彼の言い分もあつたのですが、

彼女が彼に好意をもつていたことが大きかつたようです。  
長いですが、読んでくださつて本当にありがとうございます。  
まだまだ頑張つて、続けていきます。

感想や、アドバイスがあれば書いていつて頂けると幸いです。

## 第三話 校舎裏にて彼女と一人きり。僕は考えた（前書き）

今回はとても短いです。前回と比べると三分の一程度です。

理由はPC代わりに使っていたPS3が起動不能に陥ってしまったからです。

代わりにPSPを使いました。

短い物を小出しに出していますが、少しずつ読んでいくください。

今回は、楠木と主人公が校舎裏にて、一人きりになります。主人公はなにを思うのでしょうか？

## 第三話 校舎裏にて彼女と一人きり。僕は考えた

昼間の校舎裏はどんよりと曇った空に似たアスファルトが敷かれていって、そこにある程度の湿り気と日陰が相まって、何だかスリルに満ち満ちた空氣に包まれていた。

僕は数分無言で楠木さんの隣に座っていた。  
それしか、僕には出来ることがなかつた。

彼女とは殺す、殺される仲かな、とも考えていた。

でも、あの告白も、同居や結婚という言葉は彼女自身が「僕」に好意を抱いていた証拠なのだ。

僕もそれに答えたい、否、答えなければならぬ。  
でも、どうやって？

同居・・・それくらいしか頭の中には浮かばなかつた。  
そもそも、僕は彼女を愛していないのかもしない。

昨日、告白されて、殺されかけて、今日、また告白された。

「惚れるよりも慣れ」、「親しく付き合つ中で愛が芽生える」僕の望む愛の形つてそういう物じやないだろうか。

確かに彼女は可愛い、僕にはもつたいたいないうらうに、でもお互いに未熟なのだ。

「楠木さん、僕は君が望むならば同居してもいい。でもイヤならすぐ追い出してくれ。あともう一つ、僕は君のことまだ余り知らない。だから君の本心に答える事はできない。だから、この機会に知りた  
いって思う」「う

「先輩・・・」彼女は涙を流しつつ、そう呟いた。

## 第三話 校舎裏にて彼女と一人きり。僕は考えた（後書き）

主人公は今回、彼女を自分が本当に愛している事を再確認した後、自分は彼女の気持ちをどう受け止めるか考えました。結論は「彼女の本心を受け止めて同居して、彼女を知りたい」という物でした。つまり彼は、彼女をまだ愛し切れないのです。

これから、由香やまだ出ていない登場人物との関わりで彼の心情はどう変わるのでしょうか。

良かつたら、感想、ポイント、お気に入り登録などをして頂けると幸いです。

## 第四話 夕暮れ迫る中（前書き）

今回は非常に中途半端です。

しかも、文字数がきつちり固定されているので、上手くまとめられませんでした。

PS3が帰ってきたら修繕したいと思っています。

## 第四話 夕暮れ迫る中

彼女は涙を拭つてから僕に礼を言つて校舎の外階段をパタパタと上つていった。

さて、授業をサボつてしまつたがどうするか・・

\* \* \*

先生方に愛の鞭を打たれ、疲労困憊した僕は、何時もより遅くまで学校にいた。

夕日は赤い光をテラテラと校舎に映している。

楠木さんももう帰つただろうか、僕はトボトボ歩く。

帰り道もあと半分というところで僕はある女子と出会つた。僕と同じ学校の制服を着た彼女は髪を一つに纏めていてスカート丈も長く、いかにも真面目と分かる子だ。

だが、彼女は僕を見るなり、血相を変えて僕に走り迫つてくると彼女が持つていた学生鞄で僕の顔面を殴り 「よくも麻衣を泣かせたなあ！このダメ彼氏！」

と言い、一度でなく何度も殴つてきた。

彼女は僕が楠木さんを泣かしたと思っているらしい。いわゆる仇討ちといふやつだ。

すると、彼女の後ろからまた同じ制服の女子が走つてくる。

今度は少し赤茶けていて、髪にカールを掛けた、ちょっと上品な子が來た。

「真由、なにやつてるの！？あつ、先輩。」

彼女は真由という子を止めに掛かる。

「邪魔しないでよ！このダメ彼氏！」

「済みません、先輩。私がなんとかしますから」

「真由、落ち着いて！これは麻衣の事情なんだから、首を出したら迷惑でしょ」

真由ははやつと落ち着く、交渉の余地が見えてきた。

「うむ、事情を語るよ。近くに公園があるからついで話すなー

## 第四話 夕暮れ迫る中（後書き）

さて、今回の振り返りは・・・  
まず、殴られた！何度も何度も真由に殴られた。

彼女の言っていることから推定すると、麻衣と友達関係の様で、彼女が泣いている姿をみて主人公をボコボコにします。容姿から性格から考えて、なんか一直線つて感じの子です。

あともう一人、名前はまだわからないですが、上品な髪をした同じ学校の生徒が止めに入ります。

彼女は真由と接点があるようですが、「先輩」といつているので麻衣とも関わっています。

残念ながら、そこで今回の話は終わってしまいます。

アドバイスや感想があつたら是非送つて下さい。

## 第五話 ベンチに座る二人（前書き）

今回もPSPで投稿です。

今回はとこり変わって「立ち話もなんだから」と移動した公園からストーリーが始まります。

## 第五話 ベンチに座る二人

真由とこつ子の動きも収まつたので、ひとまず僕らは近くの公園のベンチに座つてから話し始める事にした。

最初に話し始めたのは上品な彼女からだつた。

「私は、富木 みやき 怜 れい と申します、そこに居る真由や楠木さんの友達です。じゃあ次は真由、自己紹介。」

「・・・深沢 真由」

真由はぶっきらぼうに自分の名前を呴いた。

彼女はすぐに次の言葉を呴く

「先輩は・・どうして麻衣を泣かせたんですか」

宮木さんはすぐに彼女に反応して、「それは、さすがに失礼でしょう」といつて彼女の不備を指摘した。

でも、私も少し聞きたいかな、と同調する。

僕は事摘んで、「楠木さんの気持ちに答えられなかつたんだ」と  
いった。

「もしかして、振つたんですか?」と深沢さんは聞く。

「そんなことないよ、彼女の気持ちに気づくことが出来なかつたらなんだ」

「深いですね・・、憧れます」富木さんはそつと呴いた。

「先輩、私、勘違いしていたみたいですね。ごめんなさい」

深沢さんは深々と謝つた。

「別に気にしてないよ」

僕はあざだらけになつた顔で笑顔を作つた。

「先輩、もし、麻衣の事でなにか相談があつたら話して下さい」彼女は最後にそう付け加えた。

## 第五話 ベンチに座る二人（後書き）

今回で麻衣と真由、怜の友人関係がハッキリしました。

主人公に突っかかってきた、真由も最後は相談に乗ると言つてきましたし、怜も一人の仲を憧れると評価しました。

さて、これから彼女たちとはどの様な絡みになるのか、期待です

## 第六話 怜の家に（前書き）

今日は、真由と別れて、怜の家に向かいます。  
PSPにはこれが限界。  
小出しに出していくと思います。

## 第六話 怜の家に

「じゃあ、僕はこれで」

彼女と少ししゃべった後、僕は帰ることにした。

すると怜はすぐに「先輩、お怪我ひどいよつのので、手当しないと」と言つた。

確かに擦り傷やあざが少しはつて、ジンジンと痛んでいた。

「じゃあ、お言葉に甘えて」僕はそういった。もしかすると、彼女に甘えたかったのかも知れない。

「でも、私が怪我させたんだし」真由は反論する。

「大丈夫、それに私の家近いから」

彼女は名残惜しそうな顔をしたが、

「分かった。じゃあ、先輩、お大事に」

といつて、怜に仕事をまかせた。

彼女の家は本当に近かつた。ざつと見積もつて、100メートル位だ。

しかも、彼女の家は少し値打ちの高そうな、洋風な建物だった。

「さつ、あがつて下さい」

「お邪魔します」

彼女はスタスタと家の門を歩く、立ち姿も綺麗だ。

家の感じもそうだが、こいつのをブルジョアつて言うのかな？でも、こいつ見ると、真由とは全く違うオーラが彼女にはながれいるような気がする。

おしゃれで清楚だ。でも、何故、怜と真由は友達になつたのだろう？

「一つ、聞いてもいい？」

「なんですか、先輩」

「どうして、深谷さんと友達に？雰囲気が結構違うなって感じただ

ど」

彼女は自分の部屋について絨毯の上に座る。

## 第六話 怜の家に（後書き）

今回のおさらいは、  
真由と怜の性格の違いです。  
真面目で、一直線な真由、上品な怜。  
何故、二人は友達になったのでしょうか。

## 第七話 真っ直ぐな彼女（前書き）

今回は性格が違う真由と怜が何故、友人になったかを怜が語ります。

## 第七話 真っ直ぐな彼女

「富木さんはそつと口を開き始める。

「それは、真由と私が似てないからこそなんです。私は、親の影響もありますが、外見ばかりを気にしていて、誰からも変に思われぬように行動してきました。最初はそれでいいと考えていたんです。だつて、その方が端然楽でしょう?」

真由は自室に置いてあつたティッシュに消毒液を含ませ始めた。

「でも、真由は違つた。可哀想なくらい、真っ直ぐで他人に汚されないありのままの自分を学校でもプライベートでも表現していた」僕はふう、とため息をつく。きっと自分にも心当たりがあるからだろつ。

ただ、それがなんだかはハッキリしない。目の前にそれがあるのでピントが合わないだから見えてこない。

彼女はまた話し始めた。

「最初は片思いからなんです。ああ、あんな人になれたらなつて。でもいつの間にか話すようになつて友達になれたような気がします」「そうだったのか・・・」

彼女はティッシュを僕の頬につける。

結構しみる、きっと彼女が真っ直ぐだからだろつ

「ところで、麻衣さんはクラスでどんな感じ?」

「麻衣さんはいつも大人しいけど、優しくて、私たちに勉強を教えてくれたりするんです」

彼女は笑顔で話していた。

でも誰もしらないだろう。麻衣が僕を殺そうとしたこと。僕の為に泣いたことを・・・

「でも、麻衣に彼氏が出来るなんて・・・なんか先を越されちゃつたような気がします」

彼女はうつとりとした目を輝かせながら話す。

「幸せって良いですね、麻衣さんを幸せにしてあげて下さいね」

果たして僕が、彼女を幸せにすることは出来るのだろうか。

「幸せにしてみせるよ、きっと。だって麻衣さん可愛いから」

一抹の不安を抱えつつ、彼女に一通りの手当てをしてもらつて僕は家路についた。

## 第七話 真っ直ぐな彼女（後書き）

さて、今回は真由と怜の関係でした。

怜は真っ直ぐな彼女に自分と違う何かを感じ、友達になつたようです。

主人公は麻衣についても聞きますが、自分の体験の方が現実感があつたようです。

## 第八話 頑固な父（前書き）

今回、同居の許可をもらつたため主人公は父と真っ向からぶつかります。

父は彼になんといつかに期待です。

## 第八話 頑固な父

家に帰る。もう日も暮れた後、急に雨が降り出してきた。  
僕はびしょ濡れになりつつも、固い決心で父に「同居」について話さなければならなかった。

頑固者の父はそれを許してくれるだろ？  
この家は僕と父と祖母、祖父の三人暮らしが  
母は僕がものごと付かぬ頃に亡くなつた。

早速、居間にいる父と面と向かう。

「お、お前、どうしたその顔は！まさか、高一でタイマン勝負かよ  
くやつた！負けたか、勝ったか？」

女子にやられました、とは流石に言えないので、勝ったよ、と言つておぐ。

「どうでも話したい事があるんだ」

父は息子の勝利を喜びながら答えた。（嘘だけ）

「なんだ？」

「今日、彼女が出来た。どうしてもその子と同居がしたい」  
父は少し沈黙してから、「そつか、お前も大人になつたもんだ」  
すつ、と父の顔が険しくなる。

「許してくれるか、父さん！」

「ただしな世の中そんな、甘くないんだ、お前の彼女の飯はお前が  
稼げ。バイトでもなんでもいい。汗水たらして女を養うそれが男だ。  
学費は俺がなんとかする」

もうここまでくると引き下がれない、意地でもやるしかない。や  
りうじやないか！

「分った、僕は行くよ、ありがと」  
「じゃあ、これ持つて行け」

父は嬉しそうな顔をすると、黄色くなつた一枚の紙を出した。

「俺が高校出て、お前の母さんを食わすために出していた、履歴書

の余りだ」

昔の父と母を連想してなんだか、胸が熱くなつてきた。

「母さんはその頃可愛くてな、俺も職を選ばず働いたもんだ」

うつすらだが幼少に見た母さんの顔を思い出す、肌は純白で髪は長くとても綺麗だったような気がする。

それを麻衣の姿に重ねつつ、僕は学生鞄に生活用品と履歴書を持ち、夜中、雨の中、家を出た。

\* \* \*

彼女の家に着く、制服はびしょ濡れで持つてきた生活用品も濡れていた。

「先輩！ こんな時間にどうして…？」

「じめん、親と話してたら熱くなつちゃって。で、でも同屈できるよ

「とにかく、入つて下さっこ…」

あれ？怒られたかな…・・・

## 第八話 積極な父（後書き）

今回、主人公は物心つく前に失った母に対する、父の熱心な態度に  
関心して、

家を飛び出しました。彼は今後どのような努力をするのでしょうか。

感想やアドバイスがあれば送つて来て下さい。

## 第九話 彼女の家（前書き）

前回、家を出て、楠木家に飛び込んできた主人公、  
今回は彼女の家を一通り見回して、バイトの件も話します。

## 第九話 彼女の家

「じゃあ、どうぞ」

楠木さんは僕を部屋に通して、部屋を案内する。

「ごめんね、こんな夜遅くに、親にいわれていてもたつても居られなくて」

今から考えると、夜中に傘も差さずに家を出たのはバカだったな、つと後悔している。

「私、ここで一人暮らしなんで、別に迷惑してませんけど……じゃ、この部屋で良いですか？」

僕は、厨房のすぐ後ろにあつた小さな部屋に案内された。

「いいの？こんな良い部屋使っちゃって？」

「私はリビングを使ってますから」

楠木さんは僕が持つてきた生活用品を見た後、手伝います、と言つて

部屋にその品々を置き始めた。

「一人暮らし、つらくない？」

「中学生の時は辛い時もありましたけど、私には勉強がありますから」

「勉強熱心なんだね」

「でも、先輩だつて、私を説得出来たじゃないですか」彼女は少し悲しい顔をして続けた。

「勉強なんてものは、世の中では三分の一くらいしか役に立ちません。重要なのは蓄えた知識をどう使っていくかです」

確かにそうだ、そうでないと自己満足で留まってしまいます。

「だって人間つてそんなに完璧じやがないだろう、役立たずでも、いいじやないか」

「よし、これで最後」

最後の荷物を置いて、リビングに向かう。

リビングは結構広かつたが、本や資料、パソコンのじロやフロッピーで埋まっていた。

床はフローリングで、カーペットが敷かれていた。

「さすが研究者だね」

「ほとんど父のです。今はあの事件で、海外に出かけて研究していますが、いつでも作業出来る様にそのまま置いてます」

「そついえば、なんでここがレストランになつているの？」

「ここは、元々、母がこの店を経営してましたから」

「へえ、と思いながら部屋を見回す。すると、白くて丸いものが服の上に乗っかっていた。

「人骨じゃん！！」

「レプリカですよ、レプリカ」

彼女は笑う、結構びっくりした。

もう、研究者の部屋と言つべきなのか、魔女の部屋なのか分からなくなってきた。

彼女は厨房でコーヒーと、軽食のサンドウイッチを作つて持つてきてくれた。

「ありがとう」

暖かいコーヒーを啜りながら、ゆつくりと今日、父と話した出来事を話す。

「それで、バイトしなくちゃならないんだ」

「先輩のお父さんも頑固ですね。じゃあ、私が何か、紹介しましょうか？ 同級生でバイトやつている子、多いし」

僕は、同級生という言葉に引っかかった。

「そういえば、真由つて子と、怜つて子に会つたよ」

「そうですか、でもなんですか？」

君の事で殴られたとは、言い出せないので、僕が君の彼氏だつて知つていたから。と言つ。

「真由は図書館のバイトやつてますけど、どうですか？」

「えつ、そんな柄じゃなかつたよ、もつといつ活発な」

「静かで、本とか運んだりする力仕事、好みらしいので  
それも良いな、と思いつつコーヒーをまた啜る。

飲食店でせかせか働くのよりは楽そうだし、力仕事にはある程度自信がある。

「じゃあ、明日真由と話すから、休み時間、図書室集合っぽいって

「わかりました、じゃあ、私はお風呂に入つてくるんで  
あとは、彼女の次にお風呂に入つて寝るだけだ。  
この同居生活、上手くいきそうだ。

## 第九話 彼女の家（後書き）

今回、主人公は真由がやっているバイトに興味を持つて、積極的にバイトをやろうか考えました。

感想、アドバイス等があれば、送ってきてください。

## 第十話 生存競争（前書き）

今回は題名である、生存競争に主人公が気づいていきます。

## 第十話 生存競争

僕は楠木さんが入ったお風呂に入る。

お風呂の中には、彼女の甘い匂いが漂っていた。

よく考えてみれば、昨日と今日で僕と彼女の仲はとても良くなつた  
ような気がする。

それは、彼女がこの告白のもつと前から僕に好意を持ち続けていた  
為だろうか、

それとも、殺し、殺されかけた仲だからだろうか。

そういえば、彼女の出た後のバスタオル姿はとても良かつた。  
顔がほんのり赤く染まっていて、純白ではないが健康的な肌が見え  
ていた。

楠木さんは、研究者って感じがしない氣もする。

普通、研究者ってのは、汚い部屋で、コンビニの弁当を漁り、牛乳  
を飲み、いかにも不健康な

生活をしていそうだ、でも彼女にはそういうのが感じられなかつた。  
普通の十六の学生って感じだ、今を生きてるって感じがする。

彼女が研究していることは進化だ、考えてみれば、今を生きてい  
て当然だ。

今を生きて、変わり行く自分の周りの環境に柔軟に対応し、時代に  
淘汰されぬよう生存する。

それが進化だ。

僕もこの状況をありのままに受け入れて行動しよう。

僕のような人は少ない、そして淘汰されやすい存在だ。

彼女がいて、僕がいる。それが、今の状況だ。

そして、その中で生きのこつていく。

それこそが「生存競争」なのだ。

二人で生き残ろうと思つた。



## 第十話 生存競争（後書き）

今回、主人公は「生存競争」に気づいて、時代や環境に淘汰されぬ  
よう

彼女と二人で生きていくことを決心しました。

淘汰とは彼の死をさします。

彼のような、突然変異者はとても少ないため、現生人類との競争の  
間で、

滅びていってしまうのです。

それを、彼は彼女と一緒に乗り越えていこうと決意します。

良かつたら感想なども書いていつて頂けるとありがたいです。

## 第十一話 麻衣の為に稼ぐ（前書き）

主人公は前回した麻衣との会話をおり、図書室にて、真由と落ち合います。

## 第十一話 麻衣の為に稼ぐ

僕は昨日の打ち合わせ通りに真由と図書室にて会つた。

「こんなちは、先輩。」

「こんなちは、僕は軽く会釈する。」

「麻衣から聞きましたよ、バイトの事。先輩も以外とカッコいいですね、同居している彼女の為に稼ぐなんて」

「そう言わると、俄然やる気が出るよ、で求人あるの？」

「特に募集はしてないらしいんですけど、やる気さえあれば、良いって言つてましたよ」

助かつた、これで何とか親父の条件はクリアした。

「じゃあ、今日、早速行つてみてきてもいい？」

「大丈夫ですよ」

「ありがとうございます、ホント助かつた。ジュースでも奢るよ」

彼女は嬉しそうな顔をして僕に付いていく。

「コトーン」

自動販売機から出たジュースを渡して外階段をゆっくり上がる。

「彼女との夜はどうでしたか？」

「ふつ、と持っていた紙パックから吹いてしまった。

「君つて、真面目そうに見えてそうじゃないんだね。まさか、いつも猫かぶつてる?」

「全然そんなこと無いですよ、いつもからこんな感じですよ」真由は笑う。

「で、昨夜はどんなことしたんですか？」

「別に何もやってないよ」僕もなんだか笑えてきた。

でも、彼女は僕が何かして喜ぶだろうか、否、ようじぶ訳がない。

「君だったら、なにかしてくれる?」

「えつ、先輩にですか?」

「そう」

「えっと・・・」彼女は言葉に詰まる。

「なにも出来ないだろ？」

「で、でも先輩なら」「

彼女が言わんとする事を制止して、僕は話す。

「そばに居るだけで良いと思つんだ、付き合つてまだ一回だし」「真由はすこし考えた後、笑顔になつてこいつ言った。

「じゃあ、私、先輩のこと応援しますね。あと、麻衣を飽きさせないでくださいね」

\* \* \*

一週間後、採用も決まり、僕は本格的に近くの図書館でのアルバイトを始めた。

飲食店よりは楽だと思ったが、結構きつく、本の貸し出しから、整理、掃除などなど、やることは沢山あるのにも関わらず、休憩時間もほとんど無い。

作業、初めて数十分、僕はすこしへばつてきた。

「思ったよりもきついね、この仕事」

「手が動いてませんよ、先輩」「

「はーい」

整理中の本の題名を見る。「淘汰・・・」

そういうえば、生物のコーナーを整理しているんだった。

えっと・・・

生物は皆、平等でなく、生存と繁殖の差があるのでないかと考えた・・・

生物は同じ種に属していたとしても、様々な変異が見られる。変異の中には自身の生存確率や、次世代に残せる・・・

その、雄と雌の交配がよければ、強い品種になることもある。弱ければ、生存競争と呼ばれる、自然に淘汰され消えていく

つまり、同じ生物内で、篩い分けの役割をするものである。

これは、現代、薬剤耐性菌などに見られる変化と同じものがありま

す・・

斜め読みだがなんとなく分かつてきた。

「うわっ、」

視線を前に戻すと真由は本を本棚に戻していた。本を取り上げられたようだ。

「懲りないですね、先輩。」「すみません・・・」

四時間働いて、3600円。こんなので、生活持つかな?

疲れ切つて家に帰る「ただいま」

「お疲れ様、どうだつた?」

彼女は制服にエプロンをして玄関で迎えてくれた。なんか、夫婦みたいだ。

「ぼちぼちかな」

「夕食できるから、食べよ」

「そうだね」

\* \* \*

「仕事、やつぱり疲れる?」

「うん、でもやりがいが出てきたし、麻衣の為なら頑張れるよ」  
そうだ、僕は彼女のために働いている、弱音など吐かずに頑張らねばならない。

もつと稼がなければ・・・

「そなんだ」

彼女は少したためてから、こう言つ。

「明日、休日だけ空いてるよね」

「大丈夫だけど何?」

まさか、デートだろうか、僕は少し期待する。

「ちょっと仕事なんだ、付いて来て欲しくて」

少し落胆したが、彼女も忙しいのだと思う。しょうがない事だ。

それに、僕でよければ彼女の役に立ちたいとも思う。



## 第十一話 麻衣の為に稼ぐ（後書き）

今回は、真由からの承諾を受けて、今日すぐに行くと主人公は言つていました。昨日の考えもあるのでしょうか。

でも、それとは裏腹に真由は麻衣との同居生活に興味があるようですね。

主人公はその後、図書館アルバイトを始めるようになりますが、仕事が思つた以上にきつくなつてきます。

その仕事中、彼は気になる本をみつけて、チラッと読みます。内容は自然淘汰について書かれているものでした。

主人公は斜め読みをしますが、それが新たな出会いに繋がつていきます。

その帰り、彼は家で麻衣に弱音を吐いてしまいます。

彼女は優しくしてくれますが、これではだめだと、自分の体に鞭打つて働くことを決意します。

あと、ポイントや、感想、お気に入り登録してくれている方、本当にありがとうございます。

これからも続けていきますので、応援宜しくお願ひします。

## 第十一話 自然淘汰（前書き）

今回、彼女の仕事でストーリーが大きく動きます。

## 第十一話 自然淘汰

僕は、麻衣が昨日言っていた仕事に付き合つ事にした。

「仕事つて、どんな仕事なの」

「私の中学時代の先輩に会つて色々話すだけなんだけど」

「それと仕事と何の関係が？」

彼女の顔が一瞬曇る。

「あの日の事、まだ覚えてる？突然変異のこと」

「ハッキリと覚えてるよ」

僕が殺されかけた日、僕に彼女ができる日・・色々な事柄がそこに詰まっている。

その日からというもの、この不幸な呪縛から抜け出せないでいるが、逆に麻衣や怜、真由に出会つことが出来た。しかも、今はアルバイトまでしている。

まとめてみると僕の人生が180度変わった日だ。

「実はもう一人、殺さなければならぬ人がいたの」「えつ、それつてどういうこと？」

つまり、あなたの他にもう一人突然変異者が居るって事」  
そうか、突然変異者は日本に僕一人つてわけじゃないのか  
「それが、中学校時代の君の先輩だったんだ」

「殺そうとしたのは、あの日の前日」

「えつ、で、どうして止めたの？」

「罪悪感というか、上手く銃が握れなかつた。それで、思いつきり銃を取り上げられて、分解された」

「ぶつ、分解つて・・」

「彼女、強いから・・確かに、親が自衛隊らしくて」

「おい、ま、まさか僕をボディガードに使う気！？」

「そう」

「無茶いうな、帰る！」

「彼女、物分りはいい方だから大丈夫。事前に連絡したし  
家から電車で一駅行つた所に彼女の家はあつた。

こんな閑静な住宅街でそんなことがあつたのだろうか、とても信じられない。

ピンポーンとインターフォンを押して、彼女が出てくるのを待つ。  
彼女の先輩、どんな人なのだろう。

「出でこないね・・

「変な人だからね、自衛隊の親がいて武術ができるって言うのに、  
趣味はパソコンだから」

「じゃあ入ろうか・・

まるで、お化け屋敷にでも入るみたいだ。僕は生睡を飲む。  
入ると、そこはとても暗く、湿りきついて、フローリングの床から響く、麻衣と僕の足音が家に響いていた。

リビングに向かっていると、「かちかち」とパソコンの操作音がした。

「またパソコンやつてるのかな」麻衣は静かにつぶやく。  
おじやましまーすと言つてリビングから彼女の部屋をあける。  
入ると、薄暗い部屋に長い黒髪の少女が座っていた。彼女の前にはパソコンが白く光ついていて彼女の髪を照らしていた。  
「もしもーし」麻衣は彼女に呼びかけた。

「うつ、だ、誰つ？」

僕は暗い部屋に電気をつける。

彼女は振り返る、あつ、綺麗な人だ。

本当に肌が純白で、その上に掛かる長い髪は深く吸い込まれそうな黒だった。

「麻衣・・

麻衣と彼女の表情が曇つた、前の因縁からだろうか。

「弥生先輩・・

弥生という子は麻衣はしばらく見てから、僕に視線を向ける。

「へえ、これが麻衣の彼氏か・・始めて。麻衣の先輩の九条

弥生です

九条さんは、黒い髪を揺らして少し微笑んだ。

「どうも」

「麻衣、ちょっと席外してくれないかな」

彼女はすこし、睨み付けるように麻衣を見る。

こういうのが、先輩と後輩の仲なのだろうか。否そつじやない、きっと、麻衣を信じていないので。

「はい」

麻衣は名残惜しそうに、僕と九条さんを見た。

麻衣が出た後、九条さんはゆっくりと微笑みかける。

「どうだつた？」

彼女は僕に突然聞いてきた。

「なにがですか？」

「あっ、ごめんなさい。焦つてて・・あなたも麻衣に殺されかけたでしょ、その時、どう思つた？」

「最初は信じられませんでしたけど、親の血液型と銃を見せられた時は本当に驚きましたね」

彼女は少し目線を逸らし、話し始める。

「私も凄く驚いた。私ね、中学の頃は剣道部やつてたんだけど、麻衣は後輩の中でも気に入っていた、いや、親友だつたつて言つても良かつた。その子に銃を向けられるなんてね」

「麻衣が言つには、銃を分解したとか・・」

「あっ、これのこと？」

彼女は引き出しからなにかを出す。

「これ・・」

九条さんの白い手のなかに分解された銃があつた。

「いつたいどうやって分解したんですか？」

彼女はすこし笑う、

「映画で覚えたの、ちょっと見てて」

本物の銃はエアーガンのよう、「ドライバーを使わずにまるでパズルのように組みあげていく。

まるで、ルービックキューブを組み立てるような速さだ。力チャップと彼女は銃をコツキングする。

そして、その銃口を僕に向ける。

「すごいよ、映画並だ」

彼女は少し真面目な表情になる。

「動かないで、そのままじっとして」

「えつ、冗談でしょ」

ガタンとドアの空く音がして、そこから麻衣が飛び出してきた。

彼女は今まで僕に見せたことの無い驚きの表情をする。

「自然淘汰って君は知っているかな」

僕は即座に図書館で見た本を思い出す。

「知っていますよ」

「生物には同じ種類でも性質がことなる、その中には繁殖や生存にすぐれたものがいるそれが子孫を産み弱い個体を滅ぼす」「僕には九条さんがなにを言いたいのかさっぱり分からぬ。」

そう考へて、彼女は本題を言い始めた。

「私と付き合って、そして私にあなたの子を産ませて、それが自然なことだから」

「そつ、そんなこと言われても」

彼女の言いたいことはなんとなく分かる気がする、イレギュラー同士で後世に強い子孫を残したいのだ。

確かに彼女の言つことは間違いではない、むしろ正しい。

これも、ひとつ恋の形なのかもしれない。



## 第十一話 自然淘汰（後書き）

主人公は今回、 麻衣か弥生どちらかを選択しなければならなくなりました。

自然淘汰の流れでは、 弥生を選択したほうが自然だし、 そっちの方が麻衣にとっても自分のようなイレギュラーな存在を忘れられて幸せかもしれません。

でも、 麻衣が自分を愛してくれているということも知っています。ですが、 主人公はまだ彼女を愛しきれていらないかもしれません。

感想やアドバイスがあれば送つてきただけると助かります。

## 第十二話 恋敵の一匹狼

弥生さんがこんな人だと僕は思つていなかつた。

彼女と僕は同じ事情だ。だからもう少し一人口りで話していい。  
僕は麻衣に目線を向けて

「麻衣、この部屋を出でていつてくれないか」と言つた。  
麻衣は「嫌、いやだよ」と言つた。彼女の目からは涙が流れている。

「僕と彼女は同じ事情なんだ。もう少し話したいんだ」

「だから、嫌なの。あなたが先輩に取られそうな気がして。それが自然の摂理だつていわれたら逆らえないじゃないですか」

「とにかく出ていってくれ」

僕は半分自棄になつていう。

彼女はゆっくりとドアを閉めた。

\* \* \*

麻衣が出ていった後、弥生は銃を握つたまま、ありがとうと言つた。

「僕に告白しているのに、銃を持つてるのはおかしいよ  
彼女は少し微笑んで、そうね、と呟いた。

「その銃を分解して僕に渡して」

弥生は分解を始める。分解も組立と同じ大体同じ時間で終わる。

分解したあと、彼女はホッとため息をつく。

「じゃあ、もう一度言うね、彼女と別れて私と付き合つてそれが、  
自然なの」

「自然か・・キミも僕も自然に振り回されてここまで来てるよね  
「なにが言いたいの?」

「僕と麻衣は自然に振り回されていない。好きだと思つから付き合つてゐつて。彼女はそういつたんだ」

僕はすこし溜めてから、「君は僕の事、好き?」と聞く。

彼女も少し考える、しばらくしてから「考えておく」といつて、

僕も「それがいいよ」と彼女に諭した。

「好きになつたら、必ず伝えにいく・・・」

「わかつた、待つてるよ」

僕は自然に振り回されていないと言つてしまつたが、これが自然なのかも知れない。

強いから、頭が良いから、美しいから・・・人々には様々な利点がある。

だが、それを後世に伝えるためだけでは、人間にはとても不十分だ。だからこそ人々は人を好きになるというスパイクのようなものを手に入れたのではないかと僕はそう思う。

それこそが、人間という生き物にとって自然なのだ。

銃を引き出しにしまうと、弥生は少し下を向いて喋り始める。

「麻衣とは、どうなの？」

「まだ、キスさえ出来てませんし、手を繋ぐ事さえしてません」

「飽きたりしない？」

「いや、僕がいけないんだと思つています」

「積極的じやないんだ」

彼女は少し笑みを浮かべて喋る。

「それとも、まだ彼女のことを信じられない？」

「それは、多分無いです。同居してますから・・・」

「どう同居！？」と彼女は驚く。

「監視名目ですが・・・」

「そつか、それだけ麻衣のことを信じられるんだ・・・」

彼女はまた、下を向く。

「私ね、ずっと一人だった。子供の頃からずつと。親の影響もあって、自分を磨こうとして努力してたから、だから中学の時は一匹狼で部活の新入生に全く慕われなかつたの、同じ学年の人後に後輩がどんどん集まっていくのに私には誰も来ない。でも、麻衣は一人で私のところに来てくれた」

「麻衣がそんなことを」

「私も馬鹿だから、彼女を鬱陶しく思つて振り払おうと何度もきつ  
い事やらせているのに、涙を拭つて私に教えて、つて頼むんだ・・・  
」

彼女の目から、涙がポロリと落ちる。

「それって、きっと彼女が私を信じていたからだろ?と思つ。だか  
ら私、麻衣のこと信じてみようと思つ」

そういつた後、彼女の涙はタ立の始まりようにポロポロと落ちて  
いった。

「大丈夫ですよ、麻衣なら、きっと許してくれますよ」

僕はそういう、ハンカチとティッシュを手渡す。

もしかしたら、この日の出来事は麻衣が彼女を裏切ったことによ  
る、彼女の強がりな性格の暴走、  
いや、彼女の中の狼が暴れだしたのかもしれない。

突然変異という、重い現実を背負い、さらに麻衣から裏切られたこ  
とへの絶望。

彼女は本当に一匹狼のような存在になつて、最後に麻衣の彼氏であ  
る僕に目をつけたのだ。

僕が彼女と同じ立場なら、僕もそうしていたかもしれない。

## 第十二話 恋敵の一匹狼（後書き）

プロローグや、第一話を改稿しました。  
感想、アドバイスがあれば、送ってきてください。

## 第十四話 「ファーストキス」（前書き）

弥生という恋敵が現れ、さらに主人公と麻衣の関係は進展していきます。

## 第十四話 「ファーストキス」

その後、麻衣と弥生は僕を部屋から追い出して話し合い、一人とも仲直りが出来たようだ。

彼女たちが話を終えた頃には日はすっかり落ちていた。

「じゃあ、一人とも此処に泊まつていかない？」

弥生は提案する。

「えつ、先輩いいんですか？」

麻衣は嬉しそうに聞いた。

「弥生先輩とお泊まりなんて、合宿以来ですね」

勝手に話が進行しているが、泊めて貰えるならとても楽だ。

「先輩、いいですよね」

麻衣は僕に聞く。

「僕なら、別に良いよ」

「そんな敷けた事、言わないで下さいーー折角なんだから楽しみましょ

やれやれと僕は重い腰を上げる。

「じゃあ、麻衣と私は料理をキミはお風呂掃除

弥生さんの分担で、共同作業が始まった。

といつても僕は風呂掃除担当だが。

\* \* \*

風呂の掃除もやつと終わり、僕は彼女たちと食事を取った。

「美味しい」と麻衣は呟く。

「よかつた、久しぶりに作るから大丈夫かなって思つてたんだ

「弥生さんは何時も何を食べているんですか

僕は聞く、

「コンビニで買つたり簡単なものを作つて済ましてるよ。部活で忙しいから

今度は麻衣が聞いた。

「先輩まだ部活やつてるんですか」

「今度は『道部だけ』ね」

そんな話を交えつつ、僕らは夕食を取った。

夕食をとった後は食休みで、みんなでテレビを見たりしていた。

「じゃあ、お風呂どうする?」弥生は聞く。

「先輩が先で、私たちは後から入りますから」麻衣が言った。

「じゃあ、先入つてくるね」弥生はそういうと、お風呂へ行つてしまつた。

部屋には、麻衣と僕だけが残つていた。

急にテレビの雑音が消えて、麻衣は僕に話しかける。

「先輩、今日は付き合つてくれてありがとうございました」

「いいよ、別に。楽しかつたし」

「私、弥生先輩に怒られちゃいました。先輩を退屈させちゃだめだつて・・」

「確かに、彼女、僕にも聞いてきてたよ、そのこと・・」

一瞬、二人は黙り込む。

この部屋が少し、甘い緊張に包まれる。

その中で、彼女は僕に近づいてきて、僕の唇を奪つた。

十秒にも、五秒にもみたないファーストキスだった。僕はなぜか戸惑いもせず、

彼女がその唇を離してくれるので待つていた。  
暖かな彼女の体温を感じながら。

彼女があの日、銃を僕の額に当たった時あの冷たさを暖めるかのよつこ、たゞみ

その過去を清算していくかのように彼女の唇は動いた。

もしも、今、麻衣があの時のように、銃で僕を殺そうとしたとして、僕はずっとこのままだろう。

彼女の温かみから、もう僕は逃れられないのだから。



## 第十四話 「ファーストキス」（後書き）

麻衣とのファーストキスに成功した主人公。弥生は今後、麻衣と主人公の関係にどう関わってくるのでしょうか。

## 第十五話 挿り（前書き）

少しの間、編集などで次話投稿休んでいましたが、再開したいと思ひます。

今回のタイトル通り、ブランクを拭えるよう頑張っています。

## 第十五話 拭う

弥生さんがお風呂から上がった後、僕らは一人でお風呂に入ることとなつた。

弥生さんの言葉を聞いてから、麻衣は少しづつ、僕との距離を縮めようとしている。

つまり、恋愛している。でも、その先に待つものは何なのだろう。男女は自分の遺伝子をより優勢な個体に残そうと動く。それが生物にとって決められたプログラムなのだから。でも僕らが子供を作ってしまうと、人類が進化の枝分かれを始める。

枝分かれといふのは、猿と人間が木、大地と方向性を分けて進化していくことだ。

こんな事を背負つて僕らは恋愛をしている。

「ひとつ、聞いても良いかな」

麻衣は急に喋り始める。

「なに」

「私との間に子供を作るつもりある?」

「将来的の話だから、わからない」

「そうだよね、私さその時の為に、私のお父さんと相談してこの一連の事件を揉み消しにしようって考えたの」

「そんなことができるの?」

「大規模だけど、私の父さんつて外国の同じような研究所にたくさん友達が居る。その人に頼んですべての資料、データを無かつたことにする」

「何故、そこまでしてくれるので」

「先輩のことが好きだから、後、この突然変異は・・・」

彼女は急に言葉を詰まらせる。

「人為的なものだけど、人類がこれからしていく進化を先取りしたようなもののなの」

「それってどういうこと」

「私の父がその飛行機の塗装から発見した物質は突然変異を誘発させ、新たな進化を生み出す物だったのたまたまね・・だから最初に異変を確認したミミズの子供は親とのDNAに明らかな相違点ある」「これは、自然的でもあり、人為的でもあると」

「あなたや先輩に迷惑を掛けたのは、異変を見つけた私たち。だから責任を取る必要がある」「僕も手伝つても良いかな?」

「私の責任なのよ」

「僕は君の彼氏だろ、それぐらいの事して当然だ」

そういうて、僕は彼女の背中を洗う。

彼女の罪を拭うように僕はタオルで強く彼女を洗う。

「先輩、ちょっと痛い」

「あつ、『めん』」

## 第十五話　拭つ（後書き）

感想、お気に入り登録など待っています。

## 第十六話 弥生と狼（前書き）

第一話の方も改稿してあります。  
もしよければ、そちらの方も見ていくください。

## 第十六話 弥生と狼

湿っぽい話の後、（麻衣と出合えた原因でもあるから一概にそういうは言えないが）

麻衣と僕は風呂を出て、寝る仕度をする。麻衣は真っ暗でないと眠れないというので、弥生さんの部屋で寝る。というわけで、弥生さんと僕はリビングで寝ることとなつた。昼間の事も彼女は考慮して、弥生さんに聞こえぬように「先輩に襲われないようにな」といい。先輩の部屋に布団を運んでいった。

そういえば、弥生さんの銃はどうなつたのだらう。机に置きっぱなしになつてゐるならば、麻衣がその銃を回収しなければならない。もしかすると彼女はやむおえず弥生さんの部屋にて寝ると言つたのか。

弥生さんは布団を敷き終えると、僕に喋りかける。

「寝る、それとも少し話す？」

時計を見れば、時刻はまだ、九時ちょっと過ぎだった。寝るにはまだ早い。だけど話していると麻衣に心配を掛けそうだし、弥生さんのテンションが上がりつて襲われる危険性がある。

「じゃあ、テレビでも見ようか」

しまつた、麻衣に話しかける感じで話してしまつた。

麻衣にとつてみれば先輩だけど、僕からすれば同い年、大丈夫だろう。

「そうね、じゃあそしそうか」

彼女は上機嫌で答えた。僕はテレビのリモコンを探して、電源をつける。

今日は日曜日だけどなにがやつてゐるのかな。ついたテレビ画面を二人で眺める。

「洋画だね・・

弥生はぽろつと笑く。

「うん・・

このシーンどつかで見たことあるような気がする。

「あっ、」

しまった、と思つてついつい声が出てしまつ。この映画の結末を知つてゐるからだ。この映画は、主人公の恋人が冒頭で死に一人目の恋人を命がけで守るという物だ。僕はとんでもない外れくじを引いたかもしれない。もしも、弥生がこの映画に感化されたら・・

「どうしたの？」

「いや、これ見たことあつてさ」

「どんなストーリーなの？」

嗚呼、もうだめだ、と思い観念して全部話す。

「おもしろそうだね。觀よ！」といつて彼女は画面に集中する。

一時間たつて、ストーリーが面白みを増してくる頃、彼女は僕の肩に寄り添つてきた。振り払う訳にもいかずそのままの姿勢で僕は映画を見続ける。全部見終わつた時、僕が寄り添う彼女をちらと見ると彼女は寝息を立てて眠つていた。

これでは彼女が僕を襲うのではなく、僕が彼女を襲う立場になつてしまつた。

こうしてみるとクールでチャーミングなイメージのある弥生も可愛く思えてくる。暖かくて、鼻が高く小顔でとても整つた、クールな顔立ちが、今やとても気持ち良さそうな顔をして目を閉じて頬を赤く染めている。しかもよだれまで垂らして。

だが、そんな今の彼女の状況とは裏腹に彼女の黒く、しなやかで美しい髪は昼間のような狼の本性を残しているようだつた。

僕は弥生を起こさぬよつそつと布団を掛け、部屋の明かりを消した。

## 第十六話 弥生と狼（後書き）

弥生を寝かしつけた主人公。彼女の中に居る狼は今後、二人の生存競争にどのような変化を与えるのでしょうか。役者も揃い、物語は折り返し地点を過ぎました。

これからも次話投稿頑張ります。

## 第十七話 好きといつ記憶

弥生さんと二人で夜を過ごした後、僕ら一人は朝早くから家を出た。僕の服には、まだ弥生さんの気配（さつきまでそこにいたような、否、今もそこにいるような）感じが残っていた。服には暖かみさえ残っていないのに、彼女の温もりが、涎が、あの黒い髪が肩にのつかつていてるような気がするのだ。

僕らは家に帰って、制服に着替える。毎日の事だけど、麻衣の私生活はとても可愛い。高校一年で、ネクタイに苦戦するところとか、朝に冷えきったブレザーを着て寒がっている姿とか、それを思うと僕は堪らなくなる。

僕は彼女が制服を着替えている最中に後ろから抱き締める。冷えきった体に彼女の暖かい熱とブレザーのあのひんやりとした冷たさを同時に感じる。「先輩？」と彼女は疑問系で呟いて麻衣は制服を着替える手を止めた。「麻衣、好きだ。愛している」自然とでた言葉だけど、僕は初めて彼女に「好き」といえた、意志表示が出来た。弥生には僕が好きかどうか考えさせたのに、いつもそばにいる麻衣には今までずっとそんな簡単な事が言えなかつたのだ。

「私も先輩の事好き。だからもう一度・・・」彼女はもうその先を言わなかつた、否、言う必要がなかつた。

僕は腕の中で麻衣を一回転させ「キス」をする。深く長く。お互いを求めあうように舌を動かす。

それから何分経つんだろう、彼女を愛撫する道具が唇だけでなく、体全体になつたのは、彼女の頬は今まで以上に赤く染まり、顔は骨までとろけたように快樂に満ち満ちていた。だが、彼女は絶頂に向かう体をはたと止める。僕も彼女に合わせて動きを止めた。

「先輩、私達にはまだやるべきことが残っていますよ。だから、お預け！」

「うん、お預け」

僕ら一人がやるべきこと、もうそれは決まっていた。

僕と彼女が一緒になるために、彼女の研究や他の資料を丸ごと消してしまうこと。すべてなかつたことにすること。

「ひとつ、聞いてもいい？」

「なに？」

「資料やデータを消しても、すべてなかつたことにして、僕と君の出会いは覚えていてくれるよね」

「うん、ここに」

彼女は自分の胸を指差してこう続けた。

「年月と共に記憶がすり減つて劣化しても、私は絶対に忘れない」

「ありがとう、麻衣」

僕はそう言って彼女をひしと抱き締めた。

## 第十七話 好きといひ憶（後書き）

今回ほんと過激ですが、「やめやめ」と「前夜祭」です。これから、弥生や由香、真由や怜の思惑が複雑に交差していきます。

## 第十八話 澄み切った空、遠ざかる一人

遅刻しそうになつた僕らは、慌てて家を出る。

「麻衣、遅刻するから早く」

「わかつた」麻衣は家の鍵を慌てて閉める。慌てて閉めた後、あつ、と呴いて、「忘れ物しちやつた、先、行つて」と言つて、もう一回家の鍵を開け始めた。「じゃあ、先に行つてるよ」と言つて僕は一人学校に向かう。

\* \* \*

昼休み僕は、久しぶりに僕は退屈になつたので（麻衣の事や自分の事で悩み、図書室とかに籠もつていた）

あの日を境に行かなくなつた、屋上に行つてみることにした。ここは校則で入つていけない事になつてゐるが、僕はこつそりと、誰も見ていないことを確認して屋上に行き、孤独と青く澄んだ地元の空と景色を楽しむのが日課だつた。僕は暗い屋上へ続く階段を足音を立てぬよう上り、重い金属製のドアを開ける。

外に出て当たりを見回すと既に先客がいた。遠くて誰だかわからぬいが女子ということぐらいは分かる。彼女は突つ立つて景色眺めている。僕は彼女に後ろから近づく。

「しゃがんだ方がいい」

僕は小声で彼女にアドバイスをする。

「えつ、誰ですか」

彼女は後ろを振り返る。富木さんだ。夕暮れの帰り道、真由が僕に襲いかかってきた時に止めてくれた子。

「久しぶり、とにかくしゃがんで。ここからだと屋上に居るつてばしゃう」「うう

「ありがとうございます」といつて彼女はしゃがむ。

そうして少し、しゃがんだ後、僕達は一人して屋上で寝つこうがつ

てひなたぼっこをする。

「どうして、こんな所に？」

「何だか、教室が息苦しくなって、気付いたらここにいました」

「まさか、君が校則違反するとほね」

「私だって、不良になることがあるんですよ」

富木さんと僕は笑う。そんな話をした後、僕らは無言で冬の澄み切った青空を眺める。

「麻衣とはどうなんですか」

彼女は田を青空に向けながらそっと呟く。

「深谷さんと同じ事聞くんだね。まあ、いい感じだよ」

「そうですか」

彼女の表情が曇る。

「麻衣となにかあったの？」

「いや、先輩と麻衣、この頃仲良いから、真由と私から麻衣が遠のいているような気がして」

「そりなんだ、じめんね」

「別に謝ることじゃないですよ、麻衣が幸せならそれでいいんです」  
僕らはそれから休み時間が終わるまで空を眺め続けた。

## 第十八話 澄み切った空、遠ざかる一人（後書き）

久々に怜が登場しました。ですが、彼女と麻衣と主人公の間には距離がついてしまっていて、彼女は一人を羨ましがること、麻衣の幸せを願うことくらいしかできません。

## 第十九話 麻衣と怜の溝

富木さんとひなたぼっこを楽しんだ日の放課後、僕は真由がいる図書館でいつもどおり仕事をしていた。でも、気になるのは富木さんとの言葉。

「麻衣が私や真由から遠のいているような気がして」「そりや、どんな人でも彼氏彼女が出来れば少しばは態度が変わるだろう。でも怜がいちいちそんなことを気にするだろうか。隣で手を動かしていた真由に声を掛ける。

「真由、今、麻衣は学校でどんな感じ?」

「別にいつもと変わり無いけど、それがどうしたの?」

「実は今日、富木さんと会ったんだ。そしたら、麻衣が遠ざかつて行くような気がするって」

真由は表情をすこし曇らせて、数秒間黙り込む。

「麻衣はそこまで変わつていないよ、でも一人には大きな溝がある。だから怜からしたら、遠ざかるつて感じだと思つ」

「溝?」

「怜も先輩のこと好きだったんだよ、でも麻衣がそれを知らずに先手を取つた」

「そつ、そんな」

二人の溝はある告白の時から広がっていたなんて、でも、それよりも麻衣の告白は僕の突然変異に押された形だった。だから怜よりも早く告白出来たのだ。そう考えるとなんて残酷な事だろう。

「でも、先輩のこと好きなら、怜も応援してくれると思つよ。私だけて、先輩がここを首にならないように手伝つてるし」

「二人の溝を埋める方法はないの?」

「時間と会話が必要なんじやない?でも、麻衣にこの事をいつと氣を使うと思うから、それだけは止めた方がいいよ」

麻衣と怜の溝を埋めるにはどうしたらいいか、僕らは数分間、仕

事をやめて考える。

「そうだ！私、今週誕生日なんだけど、パーティーで一人を盛り上げて溝を埋めるのはどう？」

「いいね、麻衣に話してみることにするよ」

真由と僕は止めていた手を動かして仕事を始めた。

その夜、僕は麻衣に真由の誕生日パーティーの件を話す。麻衣は仕事が忙しいんだよ、と愚痴を言つて二つ返事で承諾した。なんとかうまく行つたなと思い、ちらと、カレンダーを見る。そこには殴り書きで予定がぎっしりと詰まっていた。僕の事で忙しいのに、さらに迷惑をかけてしまったかもしれない。

「麻衣、今日の夕飯、僕が作るよ」

「いいの？じゃあ、お願ひしようかな」

彼女は僕に微笑む。にしても、さっきのカレンダー、なんてスケジュールなのだろう。空いている日がほとんどない。このまま何事もないまま計画が進展するといいけど・・・

## 第十九話 麻衣と怜の溝（後書き）

感想、評価して頂けるとありがたいです。

## 第一十話 約束

パーティーが無事終わり、麻衣と怜の溝も埋まり始めた頃、季節は秋から冬へと変わつて計画は最終段階へと向かつて行った。

「それで、来週は私のお父さんに来てもらつて計画を練つて貰う」だから麻衣は僕に事あるごとに計画について話す。

「うん、ありがとう」

だが、校内でも五本の指に入つていそうな彼女が僕のよつなしけた男と付き合つていて、毎日のように話すことを許さない男も沢山いる。昨日はすこし不良っぽい先輩に田をつけられ絡まれた。

僕は麻衣としゃべったあと教室に向かう。すると急に数人の不良に一気に絡まれ、引きずらるような格好で校舎裏までつれて行かれた。

「急になんですか、こんなところに連れ込んで」

「改まつてんじゃねーよ、なんでてめえがあんな可愛い子と付き合つてんだよ」

「告白されて付き合いましたが」

今回は麻衣のように言い訳できない。麻衣のこいつらの頭では雲泥の差がある。そんな事を考えているともう一人の不良がこう切り出した。

「おー、さつさとやつまおうぜ」

僕は抵抗出来ない。後は逃げるぐらいしかなかないか・・・でもどうやって逃げようか?もう完全に逃げ道は塞がれている。

「ちよつといいかな」

校舎裏の出口から女子の声がする、それははつきりと聞き覚えのある声だ。でも、こんなところに居るはずが・・

耳を疑いつつ、僕は困まれているなかなか声のするほうを向く。ちらりと黒い髪が見えた。それはきちんと一つにまとめてあるが狼のように力強くしなやかだ。まるで、鎖をつけられた狼のようにも見

える。あれは、弥生だ、間違いない。

「那人、私の友達なんだけど、そこで放してあげてくれないかな」「てめえ、一股だつたのか！？おい、」いつ一股してんぞ「不良はさらにつき立つ。

「というか、あいつ他の高校の制服だぞ！」

「今晚のおかずに・・」

数々の情報が不良間で交錯する。だが、一つ誤認していることがある。おかずになるのは彼女じゃない。彼らの方だ。

「早くして！」

彼女は急に怒り始めた。じれったいのが苦手なのだろう。それが逆鱗に触れたのか

「おい、なめてんじゃねーよ」と一人の不良が彼女に殴りかかる。無駄なことを・・

殴りかかる相手の拳を腕で払い、横蹴りを繰り出す。クラヴマガの技を真似ているのだろう、手品のように鮮やかだ。

「わかった？早いところ彼を放して」

不良たちはさつと僕を解放する。弥生は僕の手を握り、その場を立ち去った。

「どうしてここに？」

「約束したでしょ。好きになつたら必ず言ひに行くって」「弥生さん・・

## 第一十一話 選択

「あなたのこと好き、だから付き合つて」

校舎裏の出口で僕は弥生の告白に戸惑っていた。

予想は出来ていた、こんな事がいつか起こるだろうと、麻衣か弥生を選んで生存競争をすることになる、それが突然変異を起こした僕に課せられた運命なのだ。それに麻衣が弥生を選ぶと言うことは、彼女の好きという思いをぶち壊しにもする。残酷だ。だが、僕は今、彼女に本当の思いを伝えなければならない。弥生の澄んだ目に僕の顔が映つていた。

「ごめん、麻衣を裏切れないんだ」僕ははつきりと答えた。

「私のこと嫌い？」彼女はそういつて眉をしかめる。

「そんなことない！好きだけど・・ダメなんだ」

そう、と呟いて彼女は僕に背を向ける。

「これが自然なのかもね。麻衣を選ぶのが、でも私はあなたの事が好き。なんとなくだけれど、そう思つていれば淘汰されないような気がするの」

彼女はそういうて、去つていった。僕は去り際の彼女に大声で叫んだ。

「ありがとう、うれしかった」と

\* \* \*

次の日の朝のHR、先生から転校生の紹介があつた。弥生だ。昨日、学校に転校したらしい。弥生は先生の紹介を受けて教壇に立つ。

「今日からこの学校にきました九条 弥生です」

麻衣にも受けを取らない、否、麻衣の上をいく美少女の登場にクラスは沸き立つた。

だが、僕は彼女の登場を喜べなかつた。彼女は僕を追つてこの学校に来た。なのに僕はあんな風にハッキリと彼女を振つてしまつた。こうしてみると昨日の後悔をひきずつている。こう嫌な事がある日

は決まって僕は屋上に行く。

屋上に行くとそこには以前のように先客も居りず、ただ青空が広がっていた。僕は寝転がりながらそれを只見つめる。

「こんなところに居たんだ」弥生の顔がすっと視界に飛び込む。

「弥生さん・・」僕は驚いたもののそれ以外、何の言葉も口からでない。

それから、彼女は一人ごとのように話始めた。

「女子に困まれてたんだけ、面白くなくなつてさ。やつぱり、一匹狼なんだね」

「僕がいるじゃん」

ポロッとまるでテスト用紙に涎を垂らしてしまつようにそんな台詞が口から出た。

「そうだね」彼女はこの言葉に対し何も動搖せず、にこやかに微笑んだ。微笑んだ後、視線を青空に向けた。

「空、好きなの？」と僕は聞く。

「飛行機が好きだから見てるの、地上の人間の喧騒から抜け出して自由に飛んで、それって素晴らしい？」

「そうだね」

僕も教室で起きてる喧騒を逃れるために此処に来た。だから彼女の気持ちちは良くわかる。

そのまま僕らはつと無言で空を見続けた。

何気ないそこでの彼女との会話は僕の中の後悔や彼女との溝を消してくれた。まるで、それが全部あの青空に溶け込んでいくようだ。

## 第一十一話 疲労

何時もどおりバイトを終えて家に帰る。最近は受験が近づいてきたので勉強は以前に比べてとても難しくなっている。バイトと勉強の両立は難しいが、麻衣も計画の準備で忙しいらしい。だから僕が彼女を支えなければならないと思う。

家に帰ると麻衣はぐっすりと寝ていた。食卓にはラップを掛けた食事と資料が散乱していて彼女が忙しく作業していたことが良く分かる。

僕は疲れた体で椅子に座り、食事をしながら彼女の資料を眺め回す。資料はほとんど英文だったが、一つだけ日本語になっている。

「進化の種」資料の一番上にそう書かれていた。何かのレポートだ。製作者は「楠木 桢人」麻衣の父親だろう。僕はそれを読み始める。「進化はこの地球に生命が生まれてからずっと行われているが、進化をするために重要なのが突然変異である。今年の十月に起こった米軍偵察機による健康被害は米軍偵察機に塗装されていた塗料が剥げ落ち、その物質をある特定の血液型の生物が摂取することによって発生したものである。この物質は少量でも遺伝子を破壊して不安定させ、突然変異を誘発させる。それが新たな進化の引き金となる」ここまで読んでみたが、あとは訳の分からぬ数式と一重らせん構造の図が続いていた。もう寝よう、今日は疲れた。麻衣の作った食事にまたラップを掛けて、部屋の電気を消した後、僕は布団に潜り込んだ。

しばらく経つてから、麻衣は僕が居ることに気がついたのか目を見ます。

「帰ってきてたんだ、ごめんね起きて居られなくて

「いいよ、麻衣だつて忙しいんだから」

「明日は休んだら？ 朝から晩まで働き詰めて辛いでしょ」

「いいよ、麻衣も休めないんだから」

「私、元気にしてる先輩のほうが好きだから」

彼女の寂しそうな顔がナツメ電球に照らされている。

「わかった。でも明日は麻衣も休んで」

「うん・・布団入つてもいい?」

「いいよ」

麻衣は僕の布団に入り込む、キスや抱擁とはまたちがつた温かみがある。生温いと言つてもいい。彼女の小柄で華奢な体が僕の冷え切つた体を暖めた。

## 第一二三話 クールダウン

昨日、麻衣が言つた通りに、僕は久々に休暇を取る事にした。今日は土曜日、図書館のバイトがあつたので、休みにして貰い、僕ら二人は久々に外に私用で外を出た。

「どこにいく？」

麻衣は子供のように無邪氣な笑顔を見せる。

「麻衣の好きなところでいいよ」

「じゃあ、海が見えるところが良いかな」

「わかった」

海が見えるところというと、此処、東京の外れからは結構遠くなる。  
どこに行こうか、お金は十分にある。

「なるべくなら、人が少ないとこが良いかな」

厄介なことに彼女は注文をもう一つ追加した。

「少し、遠いけど良いかな」

「いいよ」

彼女に許可を貰つて、僕は俄然やる気が出てきた。地元の駅のベンチにて十分以上計画を練り、そこから電車を数本乗り継ぎ、三回バスに乗つて、やつと工程の三分の一を終え、僕たちは近くにあった食堂で昼食を取ることにした。

「疲れた？」

「うん・・まさか先輩がこんなにアクティブな人だったなんて」

麻衣と僕は一緒に昼食の取る。麻衣は定食についているサラダを食べ、僕は焼き魚の骨と格闘していた。視線を彼女のほうに向けるとガラスの洒落た容器に入つた青いサラダを彼女が上機嫌に食らつている、僕は絵描きではないけれど、絵になるなと思い焼き魚を忘れて彼女の姿に見とれてしまう。

昼食を取つた後、僕らはまた電車に乗る。周りをみれば、冬の濃

い緑色をした山々が連なっていた。

僕らはあの山々を越え、「海が見える場所」に向かう。寒空のもとあの山々が僕ら一人の疲労や心の汚れを癒さと共に消していくような気がする。

## 第一十四話 本当の恋人（前書き）

いよいよ、物語は終盤に入つていきます。

## 第一十四話 本当の恋人

「着いたよ」

僕は疲れ切っていた彼女に声を掛ける。

「綺麗だね・・」

僕らの眼前に広がっていたのは、地平線に果てしなく広がり夕日を浴びて輝く海だった。

ここは、神奈川県の山中にある、とある公園。僕は何度かこの場所に行つた事があり、彼女の注文に合つと思いつい、この場所に行く事を決めたのだ。

僕らは疲れてがたがたになつた足で展望台のベンチに座り、この景色をじっと眺める。

「ねえ、どうして私を選んでくれたの?」 麻衣は僕にそっと喋りかける。

「どういう意味?」

「どうして私を生存競争のパートナーに選んでくれたの?」

「景色に似合わない話だね、僕は君のことが好きだからだよ。弥生は自分の遺伝子の優位性を謳つて僕に近づいたけど、それだけでは、人間には不十分だと思って、僕は断つた。君はあの日の後日、僕の事を好きだといって泣いてくれた。あれから結構経つけれど、忘れていないよ」

「もしも弥生があの時、好きだと言ついたら?」

「君の事を振つていた。あの時はまだこの出会いが、君にとつて迷惑だと思っていたから」

また僕らは、夕日を浴びて輝く海原をじっと見つめる。今度は僕が彼女に喋りかけた。

「あの夕日を浴びて輝いている海の波は今は特別な存在だけど、日が沈めば周りの波と同じになる。だからもう、この話は今日、この夕日が沈むまでにしよう。日が沈んだら、本当の恋人だ」

アハハ、と彼女は声を上げて笑う。

「先輩がこんなロマンチストなんて・・・知らなかつた」

「わ、笑うなよ」

と少し反論しながら麻衣の顔を見ると、彼女は大声で笑いながら涙を垂らしていた。もちろん、笑い転げている訳ではなさそうだが・。そつと僕のハンカチを渡す。「でも、嬉しかつた」と彼女は涙を拭いて笑顔を見せる。

「じゃあ、約束」

彼女は華奢な小指を僕の前に出した。

「何の約束?」「

「日が沈んだら、恋人になるつて約束」

僕は彼女の華奢な小指に僕の少し太い小指を重ねる。彼女は僕の小指を優しく握り指きりをした。

日は落ちていく、じりじりと僕らの思いを乗せて。

「先輩、約束守つてくださいよ」

「うん、必ず守るよ」

日が落ちると共に、気温も低下していく、いつの間にか麻衣は僕に寄り添つていた。僕も彼女の体温を感じつつ日が落ちるのを待つた。籠の町の夜景がくつきりと見え始め、ついに日は沈んだ。

「麻衣、沈んだよ」

僕は彼女にそう喋り掛けたが彼女はもう僕の傍で可愛らしい寝息を立てて眠つていた。

「まったく」といつて僕は一つため息を着く。着いたため息は公園の電灯を受け、真っ白に輝いていた。



## 第一十四話 本当の恋人（後書き）

感想、アドバイス等がありましたら書いていただけると有難いです。

## 第一一十五話 始まりと終わり

麻衣を起にして僕らはロープウローで山を下る。眼下には点々と光る麓の町の夜景が広がっていた。

「暗くなっちゃったね」麻衣は景色を見ながら呟く。

「うん、ごめんね」

「別にいいよ、楽しかったし。どこかに泊まつてこいつか」

「そんなにお金持つてるの？」

「これでも、助手ですから」

ロープウローを降りて、宿探しをする。別にどうこうがいいという訳でもないので、案外早く見つかった。

宿屋に着いて、僕らは別段何もすることが無いのでテレビを見る。こんな山奥の田舎でも、テレビは東京と大差ない。

「夏に来れば良かつたね、冬だと虫も鳴かないし、葉も落ち葉ばかりで味気ない」

「温泉が気持ちいいじゃん」

「確かに、夏に露天風呂なんかに行くと、お湯よりも地面のほうが熱かったりするしね」

彼女は笑って、「そんなことよくあるよね」と言ひて少し寂しい顔をする。

「夏になつたらまた行けるかな」

「勿論だよ」

「なにがあつても、君が望むなら」

そういうて二人で見詰め合つていたら、急にテレビが騒がしくなつた。僕はすこし顔を赤らめてテレビを見る。テレビの内容はニュース速報でロシアの大学の生物研究室で事故が起こったと伝えていた。

「始まつたんだね、計画」

「うん。でも私たちにはもう関係ないから」

「でも、昨日までずっと働き詰めだったよね、大丈夫なの?投げ出しても」

「後は、私のお父さんが日本に着てやることだから」

「そつか」

「私たちには、私たちなりの日常があるんだから。だからもう辞めるよ、この仕事。普通の学生に戻る。戻つて沢山、先輩と恋愛したい、先輩の恋人でいたい」

麻衣は少し下を向いて、初めて会ったあの田のように頬を赤らめてこういった。

「だから、先輩も普通の学生でいて・・・それで、私といっぱい恋愛して」

「ありがとう」

彼女の一途な告白に僕はこの一言しか返せない。返した後、僕の頬に一筋の線が出来る。僕は泣いてしまったのだ。それと同時に僕の背負っていた十字架の重みがすっと取れたような気がしてさらに涙がこぼれた。

今までは僕の十字架で僕を好いてくれる麻衣や弥生、怜に迷惑をかけていることばかりに目が行っていたが、自分が背負っていた「普通じゃない」という十字架「の重さまでは分からなかつた」。

だから僕は今日の夕方に彼女の幸せを願つて、この話はこれっきりにしてしまおうと彼女に提案したのだ。自分の事はそつちのけで・

・

でも、僕が彼女にいった言葉をこんな形にして返してくれた。僕はその嬉しさに涙してしまった。

僕はこれから、生存競争の存在をもみ消して普通のヒトとして生活する。良きパートナーと手を取り合つて。でも、もみ消したからといって生存競争がなくなるというわけではない。僕の生活には感じられなくとも自然の法則では僕は淘汰される存在だ。だが、彼女が傍に居れさえすれば、この生存競争を生き残ることが出来るって

僕は思  
う。

## 第一十六話 普通になつた生活・普通の恋愛

麻衣が仕事をやめて一ヶ月が経つた。計画は順調に推移している。もう既に殆どこの突然変異事件に関する資料は殆どない。それが事故だつたり、紛失という形で歴史の闇に葬られつつあるのだ。この計画は麻衣の父親が立案したものだと、麻衣は以前、僕に話していたが、彼は一体どんな人物なのだろう。普通の事故ならば、研究者を裏で色々と操れば出来るだろうが、一部の事故は、軍事施設でも起つていて、彼の交友関係はそこまで広いものなのだろうか。

麻衣は仕事をやめてから、弓道部に入った。今まではずつと帰宅部で父のサポート役だつたけど今は自分のやりたいことがしたいといい、転校してきた弥生も誘つて、毎日のように練習をしている。僕も今までは、バイトが終わつたらすぐに家に帰つていたけど、最近は部活帰りの麻衣と弥生を迎えにいつて彼女達の近況を聞くのが僕の日課になつていて、でも、本当はそんなのじゃなくて彼女が普通の女の子になつて行く姿を観察したいのだ。彼氏として。

僕は今日も何時も通りに図書館での仕事を終えて、真由と別れる。

「じゃあ、先帰るね。麻衣達が待つてゐるから」

「うん、じゃあまた明日」

彼女は手を振つて見送つてくれる。ガラス越しに正面玄関を見てみると外は真つ暗だつた。僕は点々と図書館から川沿いに続く歩道の明かりを頼りに走る。

学校に着いて、弓道部に向かつと麻衣と弥生はまだ練習を続けていた。僕は外にある自動販売機でコーヒーを買い、ベンチに座つて彼女が出てくるのを待つた。

「また楠木さんと弥生さん待ち？」

僕の姿を見て声を掛けてくれたのは弓道部の顧問の渋沢先生だ。毎

日のように来る僕の喋り相手をしてくれる。暇な時だけだか・・  
彼女は生まれつきのおっちょこちよいで、部活だろうと休み時間  
だろうといつも一つにまとめた栗色の髪を揺らして走っている。彼  
女が僕に話しかけられるというのなら、余程今日は彼女にとつて幸  
運な日なのである。

「はい」久しぶりに彼女と喋れるということは僕も幸運なのだろう、  
僕は笑顔で答えた。

「凄いんだよ、弥生さん。最近入ったばかりなのに、礼儀作法とか  
やり方もすぐに覚えちゃって」

彼女は自慢げに話す。そりやあそだろ。自衛隊員の娘で、銃も  
分解する、世界中のあらゆる武術に詳しい弥生からすれば、弓道の  
作法なんてすぐに体得できるだろ。

「隣にいる僕も怖くて・・・

アハハと渓沢先生は笑う。

「でも、ガールフレンドが傍に一人も居るなんて、君って幸せ者だ  
ね」

「えっと・・・」

彼女が不意にした発言に僕は言葉に詰まってしまう。麻衣も弥生  
も僕が突然変異を起こさなければ僕とは会って話をする事さえ出来  
なかつた。それは彼女の想像した僕らの関係とはかけ離れた物だろ  
う。だから僕は言葉に詰まってしまったのだ。

「恥ずかしいのかな？ 大丈夫だつて！ 私もそうだつたから

私もそうだつた。そうだ、僕は彼女と同じような普通の学生に戻  
つたんだ！ だから麻衣とは普通の関係だ。弥生だつて僕の事を素直  
に好きと言つてくれた。普通に、素直に、二人と恋愛していいんだ。  
そうでないと、ここまで僕を思つてやつてくれた二人の行為を無に  
してしまう。さつき、言葉が詰まつたのは、魔が差してしまつたん  
だ。もっと僕は素直にならなければ・・・

「先生。僕、もっと素直になります・・・」

「よく言つた！ 頑張りなさいよ！ 私も応援するから

先生はポンポンと僕の背中を叩いて、その場を立ち去つていった。

## 第一十六話 普通になつた生活・普通の恋愛（後書き）

感想、アドバイスがあれば是非書いて行ってください。あとお気に入り登録や評価も待っています。

## 第一一十七話 齒車は凜として動く

渓沢先生と別れて数分後たつた後、麻衣と弥生は練習から一緒に部活から出てきた。二人は歩きながら今日の練習を振り返つて談笑している。

「待つてくれたんだ」

麻衣はベンチで座つて待つていた僕に笑顔でそう言つて、僕の隣に座つた。彼女の吐く息は白く、見ていただけで暖かみが感じられる。外は相当寒くなっていた。

「これから、何か用事とかないよね？」 麻衣は僕に話しかける。「別に、何もないけど？」

「私のお父さんを空港まで迎えに行くんだけど、来る？」

とうとう麻衣のお父さんが日本に来る、それは彼の計画が最終段階に入り、自分の研究所や資料を消すということだ。つまり、僕や弥生の突然変異はすべてなかつたことになる。ということは、一人、否、怜も含めたこのストーリーはすべておどぎ話になる。僕はゴクリと生唾を飲んだ。

「行くよ、忘れないけど重要なことだから・・・」

「わかった」 もう麻衣の笑顔は消えていた。

「弥生は行くの？」 僕はベンチから背を向けて、少し遠くで話を聞いていた弥生に声を掛けた。

彼女はクルリ回つてと僕の方を向く。

「行くよ！ 私のお父さんも帰つてくるから」 彼女は少し大きな声で返事をする。彼女の顔は麻衣とは違い、とてもいい笑顔だった。

「弥生のお父さんって自衛官じゃなかつたっけ？」 今度は麻衣に質問する。

「そこを辞めて、今は海外で私のお父さんの手伝いをしているんだ」 これで何となく計画の構造が分かつてきた。麻衣の父が軍人である弥生の父の交流関係を使って軍事施設などの事故を引き起こす。

遠くに居た弥生がベンチに戻ってくる。

「私、嬉しい。何もかもすべて上手くいってる。これからはこの二人が出会った原因を見なくても済むんだよ。麻衣も嬉しいと思わない？」

「私も嬉しいけど・・」そういうつて麻衣は肩を落とす。

麻衣が何に悩んでいるか大体想像が付く、麻衣がこの事件を僕達に伝えて殺そうとしたからだ。

僕は隣に座っていた麻衣の肩を持つて強引に引き寄せた。

「大丈夫だよ、麻衣。今に全部おどぎ話になつてしまふから」

「ごめん、変なこと言って」弥生はすぐに麻衣に謝った。

「いいよ、これは私の問題だから・・」

彼女はうつむいた顔を上げてまた笑顔になつてこう続けた。

「じゃあ、私達の出会い・・もつとロマンチックな物にして

弥生も笑顔に戻る。

「わかつた、麻衣にぴったりな話を用意しといてあげる」

「あんまり、恥ずかしいのはイヤだからね！」

「恥ずかしい方が麻衣にはぴったりだよ」と彼女たちの話に僕が割り込むと、麻衣はベンチを立ち僕に膨れつ面の顔を見せる。

「私、そんなに恥ずかしいことした?」

「したと思うけど」

「じゃあ、エッチな話がいい?」

「イヤ!」弥生は笑顔で麻衣をさらに弄び始める、弄ばれている麻衣の方も笑顔だ。

こうしてみると彼女達はとても可憐で美しく、そして花束のように色とりどりの個性にあふれていてその一つ一つが凛と佇んで居る。今ここに居る麻衣と弥生だけではない、怜も真由もその一部だ。

花は一見すると歯車に似ている。彼女達は無意識にその花びらを歯車のように駆動させて今を生きていて、そして僕に今という時間を与えてくれる。すべての美しい歯車の中で最初に動いたのは麻衣だった。麻衣が動いたからこそ、その歯車達は複雑に絡み始め美し

い今を生きていく。

## 第一一十七話 齒車は速として動く（後書き）

感想、アドバイスがあれば送つて貰えると助かります。

## 第一十八話 マッシュサイエンティスト（前書き）

久しぶりの長文投稿です。

## 第一十八話 マッドサイエンティスト

空港に着くと既に、麻衣と弥生の父が到着していた。

「お帰りなさい、お父さん」と麻衣は直ぐに彼女の父のもとへ向かい、色々と喋り込んでいた。やはり、メールでのやり取りだけでは、伝えきれない事もあったのだろう。

弥生は僕の横で、自分の父親を眺めていた。

「君は行かないのかい？」

「うん・・・」

彼女は少し眉をしかめる。

「お父さんが帰つてくるのは嬉しいけど・・・なんだか、邪魔になつちゃうかなつて・・・」

「どうして？」

「男の人って、あんまり、女にあれこれ聞かれたくないじゃない？そう思つて・・・」

「確かに、そうだね」

「家でゆつくり話すよ・・・」彼女がそいつてしまらへのあいだ、少し沈黙が続く。

すると、遠くから麻衣の呼ぶ声が聞こえた。

「じゃあ、行つてくるね」

「うん・・・また来週」

麻衣の父は少し痩せ気味で度の厚い眼鏡を掛けたおじさんだった。研究者というよりかは上役のサラリーマンという感じだ。

「初めてまして、麻衣の父の 楠木 杠人です」

「宜しくお願ひします」

「麻衣から聞いていると思うけど、僕らは自分の研究を丸ごと消してしまおうと計画し、行動してきた。でも、最後は君自身の身体や人生に関わってくる。これから、色々と難しいことを言つけど、しつかり付いてきて欲しい」

「はい」

少し不安だつたが、僕はそういうしかなかつた。

「流石、麻衣が惚れただけのことはあるな」

彼は少し微笑んで、こう続けた。

「自分のことで手一杯かもしれないが、麻衣の事、宜しくな

弥生と別れた後、僕らは説明を受けるため彼の研究所に行つた。  
「散らかっているけど勘弁してくれ・・・」

彼がそういつて入つた部屋には大量の記録と本が散乱している。  
彼はその本の隙間にある大きなプラスチックで出来た水槽のよつ  
な物を取り出すと、

そこに彼の荷物に入つていたマウスを取り出し、水槽に入れた。  
水槽には水槽だが、設備が非常に大掛かりな物で底にはいくつもの  
スイッチとバイオハザードのシールが張られていた。  
さて、と彼はいつて水槽の蓋を取り出す。

蓋もまた大掛かりなもので水密扉のようなハンドルがついている。  
彼はそのハンドルを締め始める。

「密閉するの？」と麻衣が聞く。

「ああ、あれを使うからね」彼は緊張した顔でそういうと鞄から黒  
い粉末が入つた試験管を取り出して僕に見せる。

「これが、元凶だ」

「名前はまだついてないんだよ、その物質の資料が丸ごと消えちや  
つたからね」

麻衣が誇らしげにそう付け加える。

「名前も無いまま消してしまってべきなんだ・・・」

彼はため息をついて試験管を装置に差し込み水槽のスイッチを入  
れる。

「このマウスがどうなるか良く見て・・・」

黒い粉末が水槽の上から砂時計が落ちるように出始める。  
するとマウスの動きが鈍くなり、すぐに倒れた。

「「」の物質は劇薬だ。だが、少量なら遺伝子を傷つけ、突然変異を誘発させる。」

「私たちで言うと、ホルモンみたいな物だよね」

僕は彼女たちの話を黙つて聞く。なにか相槌を打とうかとも考えたが、

それじゃあ教育番組みたいで嫌だつた。

すると、柘人さんから質問が飛んできた。

「マッドサイエンティスト・・この言葉を君は聞いた事があるかな」「はい」

「まあ、だいたい、狂氣の科学者って意味だ・・この物質はそいつた類の人を生み出してしまいかもしれない、いや、もう既に生み出しているかもしれない」

そういうつて彼は、埃臭い部屋の中を歩き始めた。

「ちょっと頭を捻ればどんな事にだつて使える。医療、農業、兵器。でも、一番優先されて実用化されるのは兵器だ」

「核兵器」

麻衣はそつとつぶやいた。

「なんだこんなもんか？ 広島で原爆が使用される数日前の実験である科学者はそういったんだ。だが、その二十年、三十年後はどうだ？ ロバルト、水爆、ミサイル、果ては、原子力で動く潜水艦が水中でミサイルを発射する。こんな将来をマンハッタン計画に関わった科学者は想像できただろうか？」

彼の足は止まる。

「私はマンハッタン計画や原子力を考案した科学者はマッドサイエンティストだと思うよ・・広島・長崎に原爆を落とし、ソ連、アメリカ、いや、世界市民に核への恐怖を与えた彼らは・・私はそんな科学者にはなりたくないし、世界各国の科学者にはそつなつて欲しくないと願つている」

そういうつて、彼は少し微笑んだ。

「「」の話をしたのは九条君以来だつたから、ついつい熱が入つてしまつた

「ひよし元にしておひなすにから今日せこれで終わつじよひ・もつまにから今日せこれで終わつじよひ

## 第一十八話 マッシュサイエンティスト（後書き）

感想などがありましたらどうぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5198p/>

---

僕と彼女の生存競争

2011年5月4日20時11分発行